港北区災害ボランティア連絡会ニュース

事務局　〒222-0032　横浜市港北区大豆戸 13-1 吉田ビル 206 港北区社会福祉協議会

TEL 045-547-2324　FAX　045-531-9561　　第 73 号

HP　http://kohoku-saibora.jimdo.com　FB 港北区災害ボランティア連絡会　　2019 年 2 月

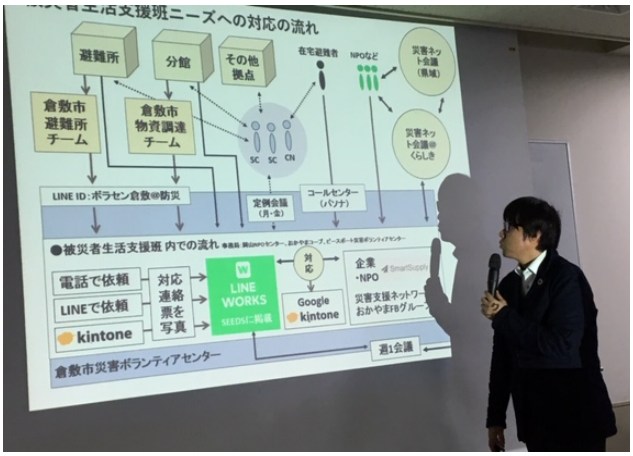
＊入会は随時受け付けています。あなたの町の防災度を高めるためにお力を貸してください

西日本豪雨災害の対応から新しいボラセン運営学ぶ

ボラセン運営に欠かせない ICT 技術

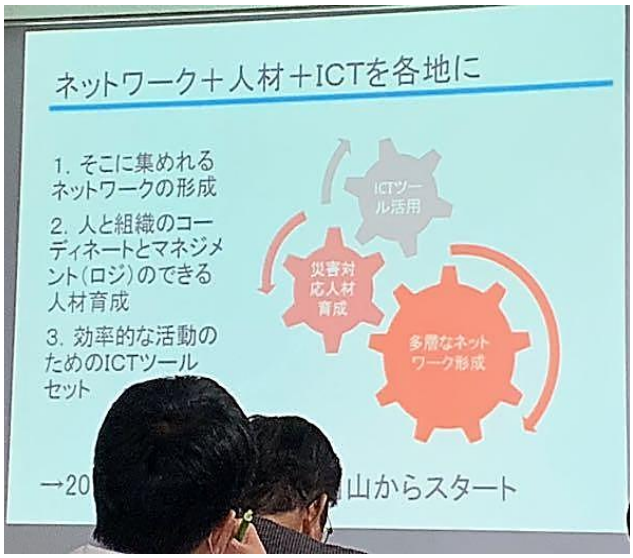
１月２３日に横浜災害ボランティアネットワーク会議主催の災害ボランティアコーディネータースキルアップ研修で、岡山 NPO センター代表石原達也氏の「災害ボランティアセンターにおける、NPO・地縁団体・広域団体等との連携について」と題する講演が開催されました。
「ペライチ」「LINE WORKS」「Google」「Smart Supply」などなど最近のインターネットの技術を駆使したボラセン運営が具体的に語られ、とても参考になると同時にそのための技術の習得をどうするかの課題を突き付けられました。中島さんの報告です。

ICT とつながりが必須と知った



災害時、避難場所の相違や避難されている方の様々な属性・個別事情などで発生する多様なニーズへの支援には、ボランティアと行政・企業・地縁団体(自治会など)や専門家(いわゆる「士業」)、宗教団体など、様々な人や団体との連携が重要だと強調されていました。実例を交えたその一つ一つのお話は、まさに「納得」としかいいようのない迫力あるものでした。

しかし何よりショックだったのは、連携や支援の提供・立ち上げに必要なものが、「資金」と「ICT(Information and Communication Technology 情報通信技術)」だというものでした。



人がいて「気持ち」があっても
（1）資金がないと動けない
（2）資金集めには日頃の準備だけでなく、インターネットで基金立ち上げる技術がいる
（3）そのためにはクレジット決済できる環境を準備しておく必要がある
（4）様々な人や団体との連携と情報の共有には、SNS やグループウエアの立ち上げ・運営のスキルがいるというものです。

社会福祉協議会の「要支援者情報」ですらインターネット上での共有ができておらず、社会

福祉協議会自体が被災してしまうと、十分に利用できない恐れがあります。1万人のボランティアの受付を「紙」と「人」で行うことは事実上不可能でしょう。

地方の小都市での災害でも、1日に1,000人～2,000人ボランティアが集まります。横浜で災害が発生した時、ボランティアは1万人を超えるかもしれません。

横浜という巨大都市での災害に備えて、本当にどうすれば1万人のボランティアを受け付けて組織化できるか。そのための検討と準備とスキルアップの必要性を実感させられました。

（中島一郎）

参考：こんな物を使っていた

・ペライチ：HPやSNSなどの製作運営
・Google：被災地行きや家屋の情報を地図とつなげる
・Smart Supply：必要なものを必要な分だけネットで募集。決済はAMAZON
・Facebook：リアルタイムの情報共有
・Peatix：ネットでボランティア受付
・Kintone：ニーズ受付やボラ活動を整理
・クラウドファンディング：ネット上で募金活動
・SuveyMonkey：民間支援の総量を数値化

多くの専門家の支援もあってこれができたそうですが、最低限知識は必要ですね。

港北区ボランティア連絡会 新春の集い

今年で40周年を迎えると言う港北区ボランティア連絡会(区ボラ連)は区内でボランティア活動を行う団体が集まっています。歴代港北区ボランティア連絡会(ボラ連)の会長は港北災害ボランティア連絡会（災ボラ）から出ています。ボラ連前会長は災ボラの元会長の井上さん、現会長は災ボラ副会長の村野さんです。災害が起きた後の復旧・復興には区内の様々な団体との協力が不可欠です。集いでは見知ったお顔も多かった反面、まだまだ交流が必要だとも感じました。この連絡会ニュースで平常時の連携を作りながら、いざと言う時は会長職を出している意味を最大限に活用して多くの区民の方々の力を活かしたいものです。

最後に出演してくれた区内のママさんコーラスグループ「アンサンブルフルール」の美しい歌声に魅了されました。私たちの総会にも出演していただけると堅苦しい雰囲気も少し解消するのではないだろうかと思いながら聴き入りました。（宇田川）

災害時の共助を考える

本会の会員である鈴木智香子さんもメンバーである横浜プランナーズネットワーク（横プラ）が主催した「必ず来る大災害！そのとき問われるハマの地域力」と題するシンポジウムが開かれました。

横プラは街作りを考えるNPOですから、街作りでのつながりを生かした発題者となりました。入り組んだ谷戸には古い住宅地、丘陵地帯に新都市を建設(港北ニュータウンなど)、鶴見川下流域や沿岸部に密集市街地、臨海部にニュータウン(みなとみらい地区)など様々な横浜市の特徴は災害への脆弱性も持っています。それを克服するためにはどうしたら良いかを、町内会の取り組み（南瀬谷ニュータウン自治会）、マンションの防災組織の作り方（ブリリアグランデみなとみらい）、企業と地域の協同（都筑区東山田）、防災ボラン

ティアの取り組み（災ボラ）が報告し、ディスカッションしました。

また会場の横浜市民防災センターはリニューアルされて、地震や火災のシミュレーターや災害シアター、減災トレーニングルームなど以前とは大きく違う施設となりました。研修施設として役に立つ物になったと思いますので是非一度足を運びませんか。（宇田川）

☆参加した港北区民のお二人からの感想です

横浜市民防災センターに行くのは15年ぶりくらいだったように思います。人には勧めるのですが自分自身で足を踏み入れていたなかったことにまず自分の意識の薄さを感じました。記憶のなかのセンターとは違って過ごしやすそうなオープンスペースもあり、さらに人に勧められるポイントができたように思います。

さてセミナー本題ですが、100名近い人数で満席の会場でした。自助といっても、若い世代の一人暮らしの方の自助、家族単位で暮らす自助、高齢独居の方や障がいのある方の自助の在り方は違うこと、共助といっても、戸建てが多い地区の共助、マンションであってもその規模によって、もともとは工場などが多い地区として都市計画されている地域（準工業地域）に住宅がある場合の共助の在り方も全く違うのだということを登壇者の方々のお話を聞いて学ぶことができました。

準工業地域という言葉を聞いて、身近な場所を調べてみたところすぐ近くが該当していることがわかりました。そのそもの都市計画を考えた上で、工場、商業テナントや、福祉施設など、街を構成する人々がお互いにとって、負担のない共助の在り方を考えていく必要性を感じました。

公助については、住宅の耐震、不燃化のための補助金などもあることを知ることができました。行政はいろいろな制度を用意していますが、なかなか末端までは届かないのだと感じます。そのようなことを伝えていくこともまちづくりに関わる活動の中では必要なことだと思いました。

（びーのびーの　畑中裕美子）

1月14日のパネルディスカッション「必ず来る大災害！そのとき問われるハマの地域力」に参加しましたが、大変勉強になりました。

テレビなどで良く見る災害ニュースでは自治体が指揮している様子が写し出されますが、実際は地域の自治会が中心となり災害ボランティアと協同しながら避難所など運営していく活動であることを知ることができました。また、パネルディスカッションの中でひときわ印象に残った言葉が「自助」「共助」「公助」でした。

パネルディスカッションに参加するまではどうしたら情報を得ることができるのか？そればかり考えていましたが、地域の取り組みを知ってからは情報を得るために自分は何ができるか？その延長上で誰かをも助けることができるのでは？と思うようになりました。

また、誰を助けるか、誰かを助けるためにどういうもの(知識、スキル他)が必要か気づきを得ることができた良い機会でもありました。ありがとうございました。

（あじさいの会　原田紀子）

救出活動ができる人材や道具は地域にあるだろうか

リレー連載　我が家の防災　㉑
小山さんちの防災

この連載は会員がどのような備え（自助）をしているかを知り、それぞれの参考にしていこうという企画です。災ボラの会員と言っても温度差があったり、家庭の構成により重点が違ったりしているのが分かりました。連載を参考にして各家庭の防災力を高めて行って下さい。今回はボーイスカウトの小山さんのおたくの備えです。

自動照明「Lumi stick-on 夜間ライト」を紹介いたします。最近流行りの流動センサーにて人が移動した事を感じ、自動的に照明する機器です。我が家では、廊下・階段踊り場、トイレ（内部）に設置しており、夜間のトイレには、電灯を点けなくても十分な明るさもあります。

センサー能力として3m5cm離れても動作し、範囲は120°と広角、自動OFFタイマーは15秒です。（電池寿命は約１年位）本体裏側に両面テープを剥がす事で、何処でも設置可能です。災害発生時の停電時は、簡易電灯でも使用出来ますし、重宝しております。

３個組￥3304＋送料（￥340：Amazon）です。

（ボーイスカウト横浜第82団　小山貴司）

★新シリーズ

いざという時の顔の見える関係作りに横浜市や港北区内で活動する団体を紹介して行きます。

＜NPO法人フォーラム・アソシエと防災減災＞

アソシエには60人の登録講師がいます。ジャンルは多岐にわたり、食育・料理・リトミック・親子体操・自然遊び・絵本の読み聞かせ・ヨガ・ピラティス・心理学・風呂敷・お片づけ・断捨離・ストールづかい・ソーラークッキングなど実に多彩です。一件、防災減災に関係は無いように見えても、実はつながっていることがたくさんあります。料理で回転備蓄や非常時の食支度、1枚の布で身を守る、絵本の読み聞かせや手遊びで子どものストレス軽減、災害時のエネルギーとしてのソーラークッキング、備蓄できる家づくりのためにはお片づけ。防災減災に関心を持つ講師が「子ども目線の防災を考えるチーム」を組み、アソシエらしい防災減災活動に取り組み始めてちょうど3年になります。

◆「災害時に子どもを守ろう」講師5人がコラボするミニ体験講座

◆「なつやすみ親子でぼうさい」防災マップづくりと親子でパッククッキング

◆「アソシエ防災減災らぼ」切り口を変えた全5回の連続講座

専門家しか防災減災を語れないのでは拡がりません。防災減災は身近にあることに気付いてほしいし、防災の輪が一つでも多く拡がっていくことで、子どもの命を守りたいと思います。アソシエのミッションは「子どもを真ん中に置いた人のつながりが多様にある社会を当たり前にする」です。防災減災もそのテーマにぴったりだと考えています。（一政）

編集後記

☆岡山の報告はビックリでした。ボラセン運営もどんどん進化しています。学ばねば。　（宇田川）

☆文章が苦手な私にもう一つ不安材料…どんどん増える災害関連単語！！
災害への意識の不足？　（付岡）

☆恵方巻きで窒息しそうになりました。「正しい食べ方」はもう止めます。　（室伏）

☆「平成」の振り返りをあちらこちらでやっています。阪神淡路大地震の映像を改めてみて、感じることが多いです。　（中島）